

議員報告書

1 議員名	小松 かすみ
2 期 日	令和7年11月12日 ~令和7年11月13日
3 研修先等	1日目 徳島県上勝町 2日目 徳島県海陽町ほか
4 内容(目的)	徳島県上勝町における「葉っぱビジネス」は成功をおさめたが、現在、高齢化による後継者問題に取り組みが行われている。その取り組みとは「全国に向け後継者の募集を行い、それに対し応募者がいて、その職に就いて定住にもつながっている。」と問い合わせに対し返答を得た。したがって、本市の農業をはじめとする後継者問題の参考にするため、その詳細を現地にて調査する。 また、阿波海岸鉄道については私鉄経営における乗客数の減少からDMV(列車バス兼用)を取り入れ運行をされている。過疎における鉄道の存続のあり方を調査し研究する中で今後の芸備線のあり方の検討材料とする。

5 報告事項

令和7年11月12~13日に徳島県上勝町および阿佐東線 DMV 沿線地域(海陽町ほか)を視察し、人口減少・高齢化・山間地域という点で安芸高田市と共通する地域における、産業振興・環境政策・公共交通の先進事例について視察調査を行った。

◆1日目(上勝町長、企画環境課職員、いもどり社長、地域おこし協力隊)

(1)葉っぱビジネスの取り組みについて

1. 葉っぱビジネスの誕生と発展

昭和61年に始まった「いもどり」事業は、和食を彩る旬の葉物を商品化した取り組みで、現在は年間2億6千万円規模、全国シェア64%を誇る。発案者の横石氏は、林業衰退とみかん壊滅に直面した中で、料理に添える紅葉に着目し、4軒の農家とともに出荷を開始。料亭に通って用途を研究し、品質向上を図ったことで協力農家は44軒へ拡大していった。高齢者が中心となり、早朝に流れる需要情報をPC・タブレットで受注し、即日収穫・発送する仕組みを構築。軽量で扱いやすく、技術とセンスが求められるこの仕事は「生きがい」「ボケ防止」としての効果も高い。現在は136軒が参加し、年間100種以上を多品種少量で生産している。

2. 事業の進化と新たな取り組み

横石氏の逝去後(2025年8月8日)、相原新社長のもとで事業は継続。コロナ禍の落ち込みを乗り越え、昨年度は過去最大の売上を記録した。主な新展開として  
棚田の新活用:蓮の葉販売で3か月300万円の売上。夏の冷涼感演出需要により成長。  
商品開発の広がり:群馬の豆産地との連携、ミニ/マイクロ葉ワサビなどの新商品。  
松竹梅戦略:高級品・稼ぐ商品・普及品を体系化し、用途と市場を拡大。

注文管理は同報無線→ファックス→専用PC→タブレットへと進化。顧客は24時間いつでも発注可能で、生産者は「早い者勝ち」で受注する仕組みがやる気を刺激している。

### 3. 人材育成と移住促進

高齢化が進む中、新規就農者確保のために「いろいろヘルパー制度（2020～）」を導入。研修生を受け入れ、2年間のプログラムを経て独立を目指す。これまで9名中5名が独立（女性が多数）。年収は400～500万円、最高2,000万円の例もある。

内閣府の移住体験事業や農業フェアの参加を通じて移住者を呼び込み、町営住宅で生活しながら技術習得できる体制を整えている。また、地域おこし協力隊とも連携し、事業継承を進めている。

## (2) ゼロウェイスト（ごみゼロ）への取り組みについて

上勝町は、2003年に日本で初めて「ゼロウェイスト宣言」を行った自治体であり、現在まで22年以上取り組みを継続してきた。焼却炉の閉鎖を機に、ごみ政策を抜本的に見直し、「焼却に頼らない地域づくり」へと舵を切った。町民の協力や事業者との連携により、現在のリサイクル率は80%超と全国でも突出した成果を上げている。

### 1. ゼロウェイストへの転換の背景

1991年、町は野焼きに代わる焼却施設を建設したが、県からの指導により3年で閉鎖を余儀なくされた。その後、焼却せずにごみを処理するため、50km以上離れた山口県までコンテナ輸送（1基17万円）を行うなど、財政的負担が大きな課題となった。この状況を打開するため、ごみを「資源」として生かす方向へ転換し、徹底した分別と持ち込み方式を導入したことが現在のゼロウェイスト政策の基盤となっている。

### 2. 45分別の徹底と市民参加型のシステム

上勝町は、「ゼロウェイストセンター」に町民が自らごみを持ち込む方式を採用。45品目への細かな分別を行い、さらに「どの業者がどのようにリサイクルするか」を明示することで、住民の理解と納得を高めている。特徴的な取り組みとして

- ・自宅での生ごみ堆肥化生ごみ処理機を導入（町の補助で自己負担1万円）。

電気代は月30～90円程度。

- ・大型ごみの定期回収2か月に1回、270円で回収。
- ・リユースの積極推進不用品の持ち込みが年間5t、それを別の住民が6.5t持ち帰るといふ、ゴミを「循環させる」仕組みが成立。

これらの仕組みにより、全国平均が20%前後である中、同町は80.8%という非常に高い資源化率を継続している。

### 3. ゼロウェイストのブランド化と交流人口の拡大

上勝町は単なるごみ政策にとどまらず、「ゼロウェイストそのものを地域ブランド」として展開している。

- ・HOTEL WHY（なぜゴミが出るのかを考える宿泊施設）
  - ・ゼロウェイストツアー・キャンプ、昔暮らし体験
  - ・杉の木を糸・繊維にして商品化するプロジェクト

・INOWプログラム（2週間滞在し、上勝で暮らしながらゼロウェイストを学ぶ）  
環境教育の場として全国から注目され、行政・企業から年間2,000件を超える視察を受け、外部団体への委託も不可欠な規模となっている。

#### 4. 企業・自治体との連携と新技術への挑戦

上勝町の取り組みは「上勝モデル」として都市部にも波及。

例として、三菱重工の自社ビル（8,000人規模）でゼロウェイスト実践実験が行われ56%を達成。今後は2万人規模でのチャレンジも検討されている。さらに、花王と協力し、紙おむつのリサイクル技術（炭素化装置）の実証実験を開始予定。少量でもリサイクル可能な仕組みを目指し、地域課題と企業技術の協働に取り組んでいる。

#### 5. 運営コストと課題

ゼロウェイスト推進には一定のコストが必要である。

- ・資源化費用：年間約758万円
- ・人件費：1,000～1,500万円
- ・光熱費や運搬費：年間3000万円規模

運搬は一般社団法人ひだまりに委託（時給1,500円、車を持たない世帯を対象に年6回）これらは財政負担ではあるが、環境教育・観光・都市部との連携など、多面的な効果を生み、町全体の価値向上に寄与している。

### ◆2日目（阿佐海岸鉄道株式会社 代表取締役専務、総務係企画広報担当）

#### 阿佐海岸鉄道におけるDMV導入と運行について

##### 1. 歴史・背景

阿佐海岸鉄道（徳島県南部～高知県東部）は、利用者の減少により鉄道路線の廃止が検討されてきた地域である。しかし、地元自治体・地域住民から「地域の足として鉄道インフラを存続させたい」「観光振興の可能性を探りたい」との声が強く、鉄道インフラの再活用が課題となっていた。この課題に対する革新的な解決策として、道路と鉄道の両方を走行できる“DMV（デュアル・モード・ビークル）”を世界で初めて実用化する方針が決定された。

##### 2. DMV実証運行の経緯

DMVは北海道で開発が始まり、阿佐海岸鉄道がその実用化の舞台となった。実証実験では、道路走行と鉄道走行を切り替える「モードチェンジ」（約15秒）安全運行のための世界初のDMV専用保安システム、バス車両の改造（マイクロバスベース）、鉄道と道路の法規を両方満たす運転資格など、多くの技術的課題をクリアしていった。

総合的な安全性が確認され、2021年12月25日に世界初のDMV営業運行が開始された。

##### 3. 自治体との連携

このプロジェクトは、徳島県、高知県、沿線自治体、国土交通省が連携し、廃線予定のインフラを活かしつつ、新たな地域交通と観光資源化を目指した官民協働の取り組みである。自治体は、駅の整備、道路と線路の接続区域（モードチェンジポイント）の整備、観光振興策などを支援し、地域ぐるみでのDMV受け入れ体制を構築した。

#### 4. DMV の特徴

- 道路走行：通常のバス（タイヤ）
- 鉄道走行：後部ゴムタイヤを下ろし、鉄輪でレール上を走行  
切替は約 15 秒で、乗客はそのまま乗車した状態でモードチェンジできる。
- 運行距離（通常運行）：約 15km
- 休日・観光コース：約 50km（室戸岬まで）
- 免許：DMV 運転士はバス運転の免許と鉄道運転の免許の 2 つを取得している。

#### 5. DMV 導入のメリット

- 乗り換え不要。バスと鉄道の接続が不要で、移動の利便性が大幅向上。
- 廃線のインフラを再活用鉄道線路の維持費を抑えつつ地域交通を存続。
- 観光資源として新しい魅力を創出。世界初の乗り物としてメディア露出が大きく、地域 PR 効果も高い。
- 柔軟性のある運行。道路と鉄道の両方を使えるため、地域のニーズに応じた運行計画が可能。

#### 6. DMV の弱点・課題

- 定員 20 名と小さい（従来の鉄道車両は 100 名前後）
- 積雪地域では運行が難しい
- 踏切では安全のため減速が必要
- 電動化が困難（車体 7~8t・バッテリー重量の増加が課題）
- 車検+鉄道車両検査の二重管理によるコスト負担
- 地域交通全体の人手不足の影響

#### 7. DMV 運行開始後の利用状況

運行開始直後は国内外から観光客が訪れ、大きな話題となった。特に週末の長距離（室戸岬までの 50km）コースは観光利用が多い。一方で、地元の生活足としての利用は、エリアの人口減少もあり限定的な面がある。

#### 8. 地域への波及効果

DMV の導入により、以下のような効果が生まれている。

- 経済・観光効果 世界初の乗り物として国内外メディアが多数取材
- 沿線観光地の来訪者増加 地域の新たなブランド化
- 交通政策への影響 全国の地方交通の再生モデルとして注目、交通と観光を組み合わせた新しい地方交通の形を提示

#### 9. 先駆者としての役割

阿佐海岸鉄道の DMV は、「世界初の実用化」＝世界の DMV 技術の基準づくりという重要な役割を果たしている。運行ルールや保安システム、車両構造、安全基準法的整備、運転士資格の仕組み、これらは“世界初”であり、同じ技術を導入したい国・地域に対してモデルケースとなっている。

#### 10. 観光資源としての取り組み

阿佐海岸鉄道では DMV を単なる交通手段ではなく、観光コンテンツとして積極的に発信している。DMV の見学ツアー、モードチェンジの見学、室戸岬までの観光運行、

乗車記念グッズ、SNS プロモーションなど観光振興への活用は地域経済にプラスの影響を与えている。

## 11. 今後の展望

今後は、タクシーやライドシェアとの連携（地域交通の再構築）運行の効率化、車両の改良観光需要のさらなる掘り起こし、人材不足対策（多免許取得者の育成）電動化・環境対策への対応（技術開発の進展が前提）次のような展開が期待される。

### ◆成果と所感等

1日目、2日目ともに小さな自治体における「ピンチはチャンス」の発想で地域資源を活用した取り組みであり、ブランド作りに非常に成功した事例であった。

上勝町は、徳島県上勝町は、「1Q：一つひとつの疑問を大切にしまちづくり」を掲げ、独自の産業創出と持続可能な地域運営を進めてきて、全国的に有名な「葉っぱビジネス（つまもの）＝株式会社いろどり」と「ゼロウェイストの先進地」として注目されている。先駆者の事業を移住者が継承して大きな成果を上げていること、常に学び事業を進化させている姿勢や民間企業との連携などにおいて非常に学ぶべき点が大きかった。特にリユースの取組みはコストをかけずにすぐ民間レベルでスタート、推進できるのではないかと考える。先日11月30日の市民文化祭で市役所内で行政としてリユースの取組みを行っていたので、市内全域的な取り組みなるよう担当課とも今後意見交換を行いたいと思う。

阿佐海岸鉄道のDMVは、「廃線の危機にあった地域交通を、世界初の技術で再生し、観光資源としても成功させた先駆的プロジェクト」で、世界的にも注目される取り組みであり、地方交通の新たなモデルケースとして重要な役割を担っている。その取組みの視察を通して、関わられた方々の熱意を感じることができ、またプラスの未来志向でプロジェクトを推進されている様子見て取ることが出来た。人材不足解消とさらなる魅力づくりのためにDMV運転手に女性の地域おこし協力隊を採用、文化センターを中心とする観光者と地域が交流できる場所の活性化や地域の子供たちを巻き込んでDMVへの地域愛を醸成するまちづくりは大変興味深く感心するものであった。

本市においては、観光需要においては自動運転の実証実験採用に向けて執行部が検討しているようである。また、公共交通計画の見直し実施が来年度から始まるタイミングであり、市民生活の足と観光需要のニーズに応えるためにしっかりとした調査し、設計をする必要があると考える。本来は公共交通計画の見直しは審議会を得て策定された素案に対して利用者や運転手など関係者の声を聞き、ブラッシュアップされるべきだと考える。ICTの活用でさらに予算を押さえながら、本当に必要な方に必要な移動支援が提供できるように、お太助ワゴンからお太助バスに乗り継ぐ仕組みについてはもっと議論の土台にあがるべきだったのではないかと考える。

今回の視察で学んだことを活かせるよう、執行部と議会が連携して地域課題の解決とより良い施策づくりに向け、さらに研鑽を積んでいきたいと考える。

以上